

りびんぐらいぶず 平成 29 (2017) 年 9 月第 3 号

弥陀の回向成就して

ご讃題

弥陀の回向(えこう)成就して 往相還相(おうそうげんそう)ふたつなり
これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ

(Ref 『高僧和讃』 「曇鸞讃第三十四首」 註釈版 P584)

はじめに

当院歓喜会には毎年若手の H 師にご出講戴き期せずしてご讃題のご和讃を取り上げて御法話戴いている。

若手だからお取次に毎年のように大きな変貌を見せて戴けることが楽しみだからである。

ご讃題は、本願力回向を正面から取り上げたご和讃であり、これをいかにして生き生きとお取次できるかは、浄土真宗のお法りをお取次する上でのすべてであるといっても決して過言ではない。それは容易ならざる業である。

面白いエピソード

H 師の師匠は、F 勤学であるご縁で曾て深川倫雄和上から伺ったとして次のエピソードをご紹介戴いた。

あるとき一人のお同行が和上に次のような御相談をなされた。

「私はこれまで、お念仏が自然に出たことがなくて困っております。どのようにすればお念仏が自然に出るでしょうか？」

実は、不肖も若い頃、自然に出るお念仏が本物で、意識的に称えるお念仏は本物ではないと受け止めて居た節がある。自力はいけないと聞かされ続けて知らず知らず芽生えた自力トラウマによる。

倫雄和上はどうお応えになったか。

「意識しなくても自然に出るのは『へ』だけじゃ。お念仏は意識的に称えて一向にさしつかえありません。」

他力の念仏の説き方に起因

江戸宗学三百年 + 百年で浄土真宗本願寺派に定着したご常教は、“称えるお念仏”を大行とは認めず、大行とは名号だと捉えてきた。

これ(下線部)は明らかな誤りだった。けれども、ご本山表の宗学では、依然としてこれが踏襲されている。

なぜなら親鸞聖人は、行巻の大行釈で「大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり」と仰せだったからである(註釈版聖典 p141)。

逆に御常教からみて、この御文の扱いが癪だった。実際に、「助けて下さい」と相談を受けたことがある。

何故、宗祖の一級御文を癪とみななければならないか。悲しい執われである。

成る程、お名号を大行と捉えて衆生が称える行為を排除してしまうと、それは無意識に出るお念仏だけが本物と捉えるのも無理が無い。

伝道上、衆生のプラクティス上まことに不自由の極みである。

この課題は**方便法身の論理**で解決できる。

色もなく形もない法性法身は、眞実の世界から法蔵菩薩と現れ給うて本願成就の報身如来（南無阿弥陀佛）にお成り遊ばした。

この南無阿弥陀佛は自らの存在を衆生に知らせ給うことを使命としていらっしゃる。

なぜなら親鸞聖人は「方便法身」について、「方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり」（Ref『一念多念文意』「註釈版聖典 p691」）と仰せだったからである。

如来がその存在を知らせ給ふ働きから見ると、

かたちをあらはし「さあ、仰いでご覧」と仰せになるのが方便法身の尊形である。

だから、「ご本尊を拝まして欲しい」と求められれば、「どうぞどうぞ」と案内すればよい。

ご尊前に額ずき仰げばただちに目に飛び込んで来て下さるものこそは、方便法身の尊形（お姿）だったからである。

韋提希夫人の住立空中尊（じゅうりゅうくうちゅうそん）の謂われに則る。

「（拝んだことが）どういふご利益がありますか」と問われれば、

「あなたが本日お参り戴いたご縁は、阿弥陀如来のお導きだったのですよ」とお応えすれば良い。

名（みな）を示して「さあ、称えてご覧」と仰せになるのが、方便法身の名である。称えれば直ちに聞こえて下さるものこそは、方便法身の勅命（お喚び声）だったのである。

「私達の称えるお念仏は如来様から賜ったお念仏であり、如来様のお勤めにしたがったものですから、称える行いは如来様の**大行**であり、されば聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、唯今阿弥陀様が私の上にお喚び声になって現れて下さったお姿そのものにほかありません」と御案内すれば良い。

曾て「お姿こそが声なんです」と梯和上から承った仰せが懐かしい。

「聞見一致（もんけんいち）」の真理である。

衆生にその存在を知らせ給う働きだったのだから、衆生に仰がしめて尊形を知らせ、名号を称えさせ、招喚の勅命を音聲として聞かしめるはたらきは、方便法身以外の何物でも無かったのである。

初めてお御堂に歩みを運ばれご縁を結ばれたお方にご案内するロジックとしては極めて有力なロジックである。

回向のロジックを明確に示す必要がある

本願力回向が浄土真宗の特徴なのに、安心論題(十七論題)では明確ではない。

経典上は、第二十二願が還相回向の願と謂われ、他力回向の教義的根拠は『浄土論』と『往生論註』であると云われているけれども、私達が接しやすい形では、「本願力回向」は、善導大師の「六字釈」を手掛かりに、親鸞聖人が縷々字訓釈を重ねて「六字釈」は、「帰命釈」で明らかにされた親鸞聖人ご自身の宗教的直感に他ならないと窺うことができる。

安心論題で取り上げていないのならば、それこそ、「伝道教学」の最初の構題として掲げる必要がある。

この程「南無阿弥陀仏って何ですか」と当院で初めてお会いした方からご質問を受けた。「南無阿弥陀仏は、インドの言葉の音訳で言葉自体に意味はありません。これを意識した言葉が帰命無量寿如来ですよ」とご案内すると、

「帰命とは、ものごとが奇妙なというあの奇妙ですか」とお訊ねになった。

無理もないお話である。

なぜなら「帰命」は私達の日常用語ではなかったからである。

「帰命」とは、「お願いだから私の願いを聞いておくれ」との阿弥陀如来の切なる願いのお言葉なのです。「帰せよの命、如来様のご命令、勅命に帰せよ、頭を垂れよ」とのお言葉だったので、お正信偈の最初のお言葉です。

「南無阿弥陀仏、帰命無量寿如来」は、私が苦悩の人生の真っ只中に立ったとき、西岸にまします阿弥陀如来が「ただちに來たれ」と仰せになるお喚び声だったので。

そのお喚び声に喚び覚まされるとき、もう私はひとりぼっちではなく、私には、如来様に抱かれながら歩む人生が恵まれるのです。

浄土真宗のお念仏のみ教えは、こうして賜ったお念仏を称えつつ、聞こえて下さる如来さまのお喚び声をお聞かせに与りつつ、お浄土へと続く一本の白道を歩むお念仏の道行きだったので、とお応えすることになるのであります。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌第八回実行委員会三日十九時
正覚寺彼岸会 九月二十二日(金)十四時、十九時半
九月二十日(水)徳勝寺、二十一日(木)種徳寺、二十三日(土)法泉寺、二十四日(日)徳善寺
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥